

〔禁秘御抄上〕朝夕御膳事

殿上臺盤侍臣以下行之、上古公卿著小臺盤用土器。近代不然、匡房記云、其頃猶希有事也云々。  
主上著倚子御覽臺盤、近代絕畢、其時主殿司退、藏人居物也、倚子寄臺盤上程、凡出御殿上作法也。  
〔日中行事〕陪膳の人殿上にたちて、まづ手水をめす、頭はくら人これをかく、殿上人は主殿司かく  
る也、わた殿にたてたる臺盤を、だいながら二人してかきて、大床子のまへによこざまにすへたり、  
ばとう盤あり、次々の藏人二人、この御だいばんをかきて、一の御だいの南にたてざまにすふ、  
〔雅亮裝束抄〕ないらんのいゑに、もやのだいきやうをすきのだい饗となづけてせらるゝ事あり、  
みさうぞくのていづねのもやのにおなじ事なり、そむざ以下の上達部に、ちいさき大ばんを  
すへて、がうしのやうくなるにてきやうをすふるなり、だいばんのていそんざもおなじ、たゞ  
しよこざの大納言已下はむかひざなり、大ばんはふたつをなかをすかさずをしあはせて、きや  
うをすふるなり、その臺盤のをしあはせたるなかにわたりて、ふちのうへにくだものをする  
を、なかすみ物といふなり。

〔空穂物語吹上之下〕をとこども五十人ばかり、なみいてだいばむたて、ものくふ。

〔源氏物語須磨〕わづらはしきことまされば、所せくつどひし馬車のかたもなく、さびしきに、世は  
うき物なりけりとおぼしらる、だいばんなどもかたへはちりばみて、た、み所々ひきかへし  
たり、

〔繁花物語三十九〕おはしまし所を見るにつけても、殿上人もなくなりもてゆく、大盤もちりつも  
り、○下  
り、略

〔江次第抄二月〕大臣家大饗

藤氏一大臣 藤氏一大臣者、謂氏長者也、用朱器臺盤、此朱器等者、閑院左大臣冬嗣公御物、在勸學